

川端文学の研究 — 「不二」の美

グエン・ルン・ハイ・コイ（日本大学）

一般的に言えば、「美」と「醜」は対立的な二つの現象である。しかし、川端文学には「醜」との対立のない「美」がある。これは川端文学において「売春婦」という藝術的な形象に現す。また、この「美」は、川端文学において「売春婦」のイメージと仏教の「菩薩」との共通点である。仏教の「菩薩」は、生と滅、垢と浄、善と不善、我と無我、色（現象性）と空（全体性）などは、相反的な現象であるが、それら現象の本質が「空」であり、それらは元々二つに分離されず、一つのものであるという一元的な世界の見方を持っている。この世界観は仏教において「不二」という思想である。

本発表の目的は、仏教の「菩薩」の思想からみて、川端文学に於ける「売春婦」の性格を分析し、その藝術的形象にあらわれる「不二」の美を明白することである。川端文学の研究史の上で、「売春婦」という藝術的形象について論じることがあるが、そのイメージの本質が何かまだ明かにされていない。本研究は、先ず、川端文学において売春婦というイメージの美を論じ、これは仏教の菩薩の美との共通点があると論じる。「売春婦」の美は「菩薩」のように、垢と浄、善と不善との対立を越える「不二」の美である。最後、本発表は、仏教において「不二」の美の思想について論じて、川端文学において「不二」の美の根源は、この仏教の「不二」の美の思想であると指摘する。

つまり、本発表は次の新知見を明かにする。先ず、川端文学において「売春婦」という藝術的な形象の特徴は「醜」との対立のない美である。そして、その形象の美の根源は、仏教における「不二」の世界観である。